

ニッポン

ドクター和の

臨終回巻



「治療法のない難病にかかるとは、医学の発達前の古代人になったようなものと思つています。今ある姿を楽しむ『古代の心』をもつて暮らしましよう。」

クイズ番組「クイズダービー」の珍回答で人気だった学習院大学の篠沢秀夫名誉教授の著書『命尽くとも』に書かれていた言葉です。

篠沢教授は2009年に筋萎縮性側索硬化症(ALS)を発症しましたが、執筆後も執筆や講演を続けていましたが、10月26日に亡くなりました。84歳でした。

古代の人は、ああすればよかったとか、本當はこうしたいなど余計なことを考えず、あがまま生きた。だか

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

篠沢秀夫

(29)



ら古代の心を持てば、不治の病にかかった自分を嘆くこともない——医者の私はこの発想に脱帽です。教授は仏学者でしたのが、「足を知る者は富む」と説いた老子とも通ずるものがあるような気がします。

教授が体に異変を感じたのは08年。まず、ろれつが回らなくなりました。翌年1月にALSと診断されるも当時は病気を認めたがらなかつたそうです。し

ALSは、脳や末梢神経の指令を筋肉に伝える運動ニューロンという神經細胞が徐々に変性し、死滅していく病気です。走りににくい、箸が持てなくなつた、筋肉痛が治らない、びくびくするなどの手足の異変や、嚥下(えんげ)障害も初期症状として挙げられます。

進行のスピードは人それぞれですが、知覚神経や自律神経は侵されないので、記憶や五感や知性は最期まで維持されるのもこの病気の特徴です。

ですから教授も声は失つて

も、変わらぬ言語能力で執筆ができたのです。

ALSの原因については諸説あります。まだ不明です。進行を抑える注射薬が最近承認されたが、根治療法はまだ見つかっていません。今後、遺伝子治療

に期待したいところです。
「古代の心」を持つ一方で、教授は機械を上手に使っていたように思います。人工呼吸器はもちろん、自分の声を再現できる音声合成装置を使い、度々メールで発言していました。積極的に仕事をこなし、奥様のサポートのもと、進行していく姿を堂々と見せていたことに、希望をもつた患者さんとご家族は多くいるはず。

私も今まで約20人のALS患者さんを在宅で診てきました。まばたきでの意思伝達装置を上手に使い、おしゃべりを楽しむ人も。人工呼吸器は延命措置ではなく生活を楽しむための道具にすぎません。

「古代の心」と最新機器で、人生を謳歌(おうか)してほしい。不自由だけど不幸ではないことを、教授は教えてくれました。

中、「iPS細胞による世界初の治療」とあるのは「世界初の治療」の誤りでした。

訂正

10月6日発行の平

尾誠一さんとの記事